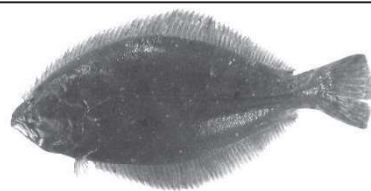


ヒラメ

Paralichthys olivaceus

地方名
あおば、てっくい



生態

- ①寿命：オス 10 年以上、メス 20 年以上
- ②成熟：オス 2 歳以上、メス 3 歳以上
- ③産卵期：5 月～7 月
- ④産卵場：水深 30m 以浅の粗砂及び砂礫地帯
- ⑤分布：千島列島から九州、東シナ海に分布
- ⑥生態：産卵後 1 日～2 日でふ化し、約 1 ヶ月間の浮遊期間の後に水深 10m 以浅の砂または砂泥域に着底し、成長に伴い深所へ移動する。生息域は水深 100m 以浅の海域。季節的に深浅移動する。稚魚はアミ類を主に摂餌し、成長とともに魚類、イカ類を捕食する。

主な漁業

ヒラメはほぼ周年にわたって県内全域で漁獲される。日本海から津軽海峡西部にかけては 5 月～7 月に底建網・一本釣りで、陸奥湾から太平洋北部にかけては 5 月～7 月及び 11 月～翌年 1 月に定置網・底建網・さし網で、太平洋南部では 9 月～10 月にさし網で、11 月～翌年 5 月に小型底びき網で漁獲される。1 歳～2 歳から漁獲される。

資源の動向と水準

日本海-陸奥湾海域の資源尾数は 2006 年に 1,709 千尾と 1993 年以降最高となったが、翌 2007 年から増減しながらも減少傾向で、2019 年の資源尾数は 663 千尾と、1993 年以降最も少なかった。津軽海峡東部-太平洋海域の資源尾数は、2005 年に増加して以降緩やかな減少傾向で、2019 年の資源尾数は 1,771 千尾と、1999 年以降最も少なかった 2004 年に次いで 2 番目に少なかった。

2020 年の資源動向は、コホート解析により推定した資源量の直近 5 年間の傾きから減少と判断した。2020 年の資源水準は、長期間データを有する漁獲量を判断材料とし、その最高値と最低値との間を 3 等分し、上から高位、中位、低位とすると、中位であった。

* 日本海-陸奥湾海域：大間越漁協から小泊漁協に、津軽海峡西部の竜飛今別漁協、三厩漁協、陸奥湾の外ヶ浜漁協から脇野沢村漁協を含むものとした。

* 津軽海峡東部-太平洋海域：階上漁協から尻屋漁協に、津軽海峡東部の佐井村漁協から岩屋漁協を含むものとした。

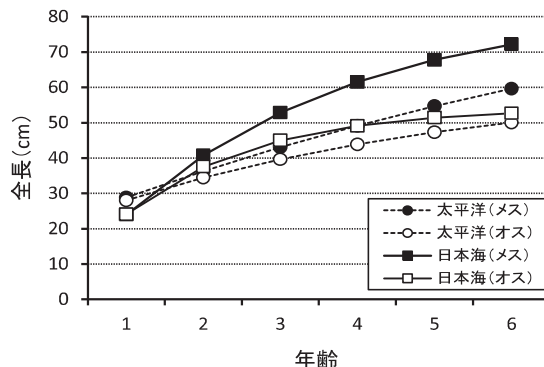


図 青森県におけるヒラメの成長

* 出典 太平洋：Yoneda et al. (2007) Fisheries Science, 73, 585-592.

日本海：吉田ら (2011) 青産技セ水研研報. 7, 1-8.

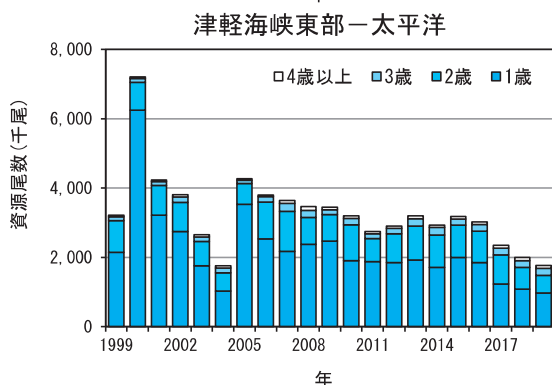
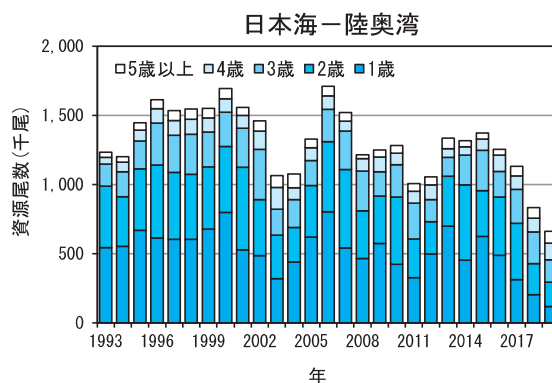
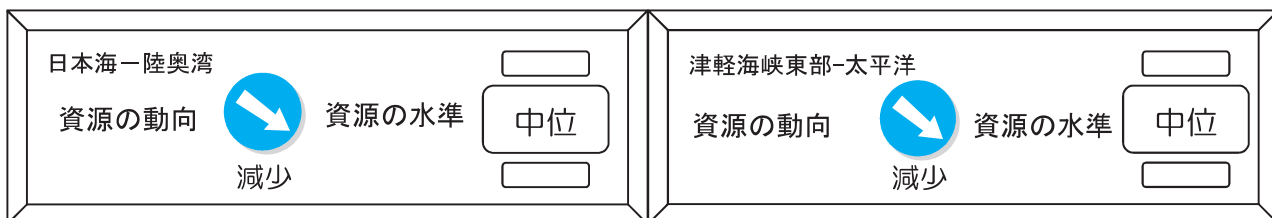


図 各海域の年齢別資源尾数の推移（上図：日本海-陸奥湾、下図：津軽海峡東部-太平洋）



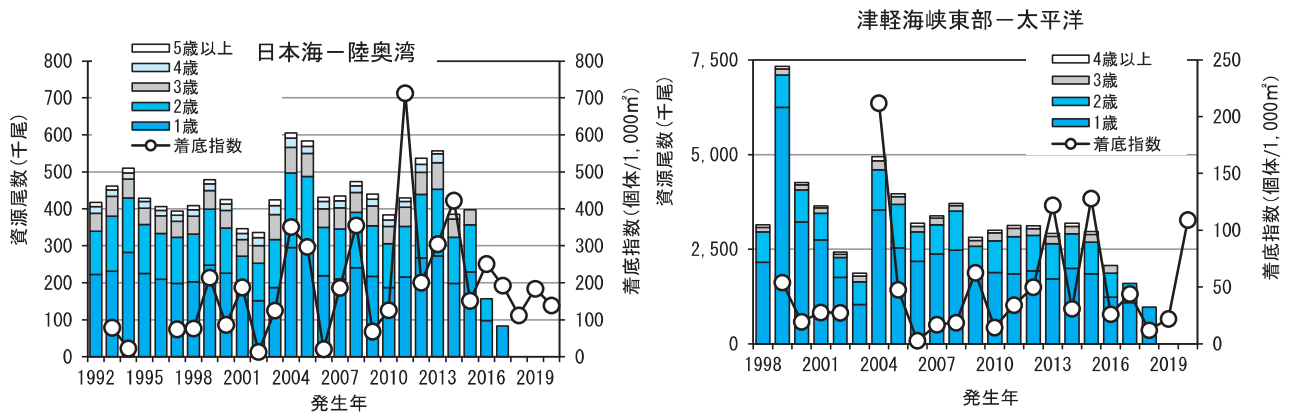


図 発生年別ヒラメの年齢別資源尾数と着底指数の推移（左：日本海-陸奥湾、右：津軽海峡東部-太平洋）

（日本海ヒラメ稚魚発生量）

2020年のヒラメ稚魚の着底指数は131で、1980年年以降の平均値149を下回る水準であった。

*着底指数：発生量の指標値。つがる市沖で夏期に着底稚魚調査を実施。水深別の平均分布密度（個体/1,000m²）の年最高値。

（太平洋ヒラメ稚魚発生量）

2020年のヒラメ稚魚の着底指数は109で、1999年以降の平均値49を上回り、過去4番目に高い水準であった。

*着底指数：発生量の指標値。三沢市沖で夏期に着底稚魚調査を実施。水深別の平均分布密度（個体/1,000m²）の年最高値。

海域別漁獲量及び漁獲金額

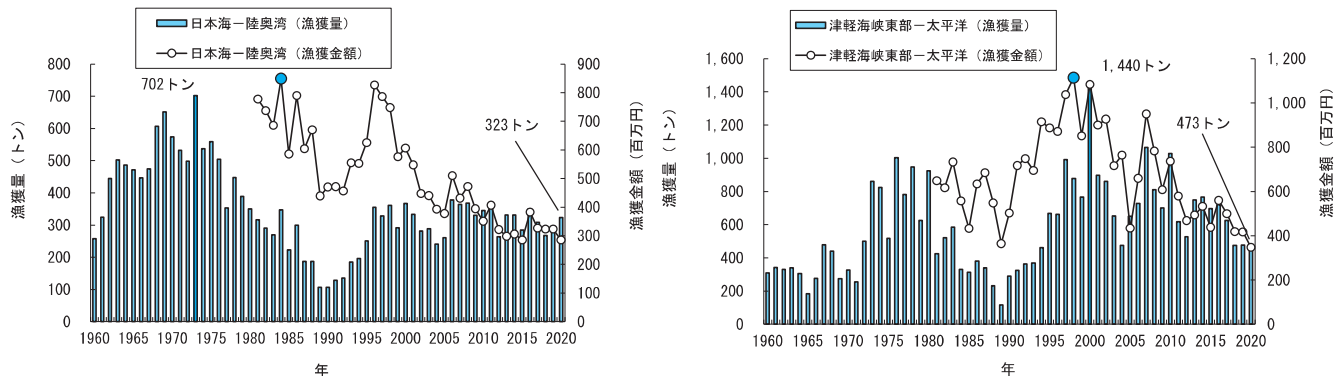


図 青森県におけるヒラメの海域別漁獲量及び漁獲金額の推移

資源を上手に利用するために

- ひらめ資源管理指針（1990年3月）、資源管理計画（日本海：1994年3月、太平洋：1996年3月）
 - ・全長35cm未満個体の再放流の他、さし網についてはひらめ網の目合制限（6.0寸以上）、三枚網の禁止、留網の禁止などを定めている。
 - 青森県太平洋海域ヒラメ資源回復計画（2008年3月）
 - ・小型ヒラメの保護を推進するため、さし網漁業では9月～12月の水深10m以浅の区域、小型機船底びき網漁業は北緯41度以南の水深100m以浅の区域におけるヒラメを目的とした操業の自粛を定めている。
- ☆上記の取組を継続することが必要である。

トピックス

- ・1988年に「県の魚」に制定される。
- ・1990年以降、年間200万尾の計画で種苗放流が行われており、2020年の放流尾数は99.6万尾。